

池袋の怪

岡本綺堂

青空文庫

安政の大地震の翌^{あく}る年の事で、麻布の某藩邸に一種の不思議が起つた。即ち麻布六本木に西国某藩の上屋敷があつて、ここに先^せんとの殿のお部屋様が隠居所として住つて居られたが、幾年来別に變つた事もなく、怪しい事もなく、邸内無事に暮^{しか}していた。然るにその年の夏のはじめ、一匹の蛙^{かわず}が椽^{えん}から座敷へ這上つて、右お部屋様の寝間の蚊^{かちよう}帳の上にヒラリと飛び上つたので、取あえず侍^こしもと女共を呼んでその蛙を取捨てさせた所が、不思議にもその翌晩も飛び上る、その翌々晩も這上る。草深い麻布の奥、元より庭も広く、池も深く、木立も草叢も繁^{おいしげ}茂^げっているから、夏季になれば蛇も這出そう、蛙も飛出そう、左^さのみ怪しむにも及ばぬ事と、

最初は誰も気にも留めずに打過ぎたが、何分にもその蛙が夜な夜な現われると云うに至っては、少しく怪しまざるを得ない。しかも日を経るに随^{したが}つて、蛙は一匹に止らず、二匹三匹と数増して、果^{はて}は夜も昼も無数の蛙が椽に飛び上り、座敷に這込むという始末に、一同も是^これ尋常事^{ただごと}でないと眉を顰め、先ずその蛙の巢窟^{ほら}を攘^{はら}うに如^{ごと}くと云うので、お出入りの植木職を呼あげて、庭の植込を洗^ふかせ、草を苴^すらせ、池を浚^{さら}わせた。で、それが為かあらぬか、その以来、例の蛙は一匹も姿を見せぬようになったので、先ず可^よしと何^いれも安心したが、何ぞ測らん右の蛙がそもそも不思議の発^い端^ずで、それからこの邸内に種々の怪^{あやし}異^{しみ}を見る事となった。ある日の夕ぐれ、突^{だし}然^{ぬけ}にドドンと凄じい音がして、俄に家がグラグ

ラと揺れ出したので、去年の大地震におび驚えている人々は、ソレ地震だと云う大騒ぎ、ところが又忽ちに鎮つて何の音もない。で、それから毎夕ひともしごろ点燈頃になると、何処いざくよりも知らず大浪の寄せるようなゴウゴウという響ひびきと共に、さしもに広き邸がグラグラと動く。詰つめあい合の武士も怪しんで種いろいろ々に詮議穿索せんぎせんさくして見たが、更にその仔細が分らず、気の弱い女共は肝きもを冷して日を送つている中に、右の家鳴震動は十日ばかりで歇やんだかと思うと、今度は石が降る。この「石が降る」という事は往々聞く所だが、必らずしも雨霰の如くに小歇おやなくバラバラ降るのではなく何処いざくよりも知らず時々バラバラと三みつ個四よつ個飛び落ちて霰しばらく時歇やみ、また少しく時を経て思い出したようにバラバラと落ちる。けれ

ども、不思議な事には決して人には中^{あた}らぬもので、人もなく物も無く、ツマリ当り障りのない場所を択んで落ちるのが習^{ならわし}慣だという。で、右の石は庭内にも落ちるが、座敷内にも落ちる、何が扱^{さて}、その当時の事であるから、一同ただ驚き怪しんで只^{いたずら}管に妖怪変化の所^{しわざ}為と恐れ、お部屋様も遂にこの邸^{やしき}に居^{いた}堪^{たま}れず、浅草並木辺の実家へ一^{ひと}先^{とまず}お引移りという始末。この事、中屋敷下屋敷へも遍^{あまね}く聞え渡ったので、血気の若侍共は我れその変化の正体を見届けて、渡辺綱、阪田公時にも優る武名を轟かさんと、いづれも腕^{さす}を扼^{さす}つて上屋敷へ詰かけ、代る代る宿直^{とのい}を為^したが、何分にも肝腎の妖怪は形を現わさず、夜毎夜毎に石を投げるばかり。で、一同も少しく魂負けがして、念の為に石の最も多く降るといふ座

敷にズラリと居列いならんで、屹きつと頭かしらをあげて天井を睨み詰めていと、
 石は一向に落ちて来ぬ。かくて半はんとき晌も過ぎると、何れいずも漸あきく飽
 が来て、思わず頭たを低たれると、あたかもその途端に石がバラリと
 落ちるといふ工合で、どうしても上に物あつて下の挙動を窺つて
 いるとよりは見えぬ。それには何れいずも持て余してどうしたらよか
 ろうと協議の末、井神何某と云う侍が、コリヤ狐狸しわざの所為しわざに相違
 ないから、恐嚇おどしに空鉄砲を撃つて見るがいいと、取あえず鉄砲を
 持つてその場へ引返して来る、この時早し彼時遅し、忽たちまちひとつに一個
 の切石が風を剪つて飛んで来て、今や鉄砲を空に向けんとする井
 神の真向まへに礮はたと中あたつたから堪らない、眉間は裂けて鮮血なまちが颯さつと迸ほ
とばし出る。この不意撃とばしに一同も総立となつて、井神は屈せず鉄砲を

放つたが、空砲からづつとは云いながら何の効目ききめもなく、石はますます降るといふ始末に、何れも殆ど匙いすを投げて、どうにもこうにも手の着つけ様ようがない。何しろ、これまで曾かつて人を傷つけたことの無いこの石が、鉄砲を持出すと直ちにその人を撲うつというのは如何にも奇怪で、何でも怪しの物が潜ひそんでいるに相違ないと、更に家探やしに取かかつて、座敷内は云うに及ばず、天井裏まで取調べたけれども、更にこれぞと云う手懸てがかりもなく、また庭の内には狐狸の住家らしい穴も見当らぬので、ただ不思議不思議と云い暮して日を経る中に、ある者の説に曰く、昔からの伝説いいたえに、池袋村あ（北豊島郡）の女を下女に雇うと、不思議にもその家に種々の怪あ異やしみがある。これは池袋の神が我が氏子を他へ遣るのを厭いとつて、

かかる崇たたりを為すのだと云う、で、今度の不思議も或はその崇ではあるまいか、念の為にこの邸の下女を調べて見たらば可よかろうとの事。成ほど、そんな事があるかも知れぬと、侍こしもと女下女を一々取調べた所が、果してその中に池袋生れの者があつたので、当人の知つた事ではあるまいが、兎も角もこれに長の暇いとまを出して、さてどうであろうとその後の模様を窺うと、石は相変らず降る。エエ何の事だ、池袋もあて的にはならぬと愚痴こぼを翻こぼしていると、それから二日経ち、三日経つ中に、石は次第に数が減つて、五六日の後には一個も降らぬようになったのも不思議、しかもその後には何の怪あやし異しみもなかつたことはいよいよ不思議。で、右の怪異は全く池袋の祟と一決して、一同もホツと息を吐いたと云う。

以上は紛れもなき事実で、現在これを目撃した人の談話をその
まま筆記したものである、しかしそれが果して池袋の祟であるや
否やは勿論保証の限かぎりでない。今日でも北豊島に池袋村という村は
存在しているが、当時は曾てそんな噂を聞かぬ。けれども、江戸
時代には専らそんな説が伝えられたのは事実で、これに類似の奇
談が往々ある。で、名奉行と聞いた根岸肥前守の随筆「耳袋」の
中にも「池尻村とて東武の南、池上本門寺より程近き一村あり、
彼の村か出生の女を召仕えば果して妖怪などありしと申し伝えたり、
実否を知らず」と記しるしてある。シテ見ると、池尻の者にもそんな
伝説があるか知らぬが、これは余り聞き及ばぬ事で、恐らく筆者
の肥前守が池袋を池尻と聞き誤ったのではあるまいか。しかし北

豊島と池上では、北と南で全然方角が違うから、或は實際別物かも知れぬ。兎にかく江戸時代には池袋の奉公人を嫌うとは思議で、何か一家に怪しい事があれば、先ず狐狸きつねの所為しわざといひ、次には池袋と云うのが紋切形の文句であつた。又一説には、単に奉公人として召仕う分には仔細ないが、万一これと情を通ずる者があると、それから種々の怪異を見るのだとも云う。何方どっちにしても、その原因や理由の解わからう筈はなく、当時ではかかる噂も全く絶えて了つたようだ。

(『文藝倶楽部』02年4月号)

* へ日本妖怪実譚〉 (記者) より。筆名は「不語堂」使用。

青空文庫情報

底本：「文藝別冊「総特集」岡本綺堂」河出書房新社

2004（平成16）年1月30日発行

初出：「文藝倶楽部」

1902（明治35）年4月号

※初出時の署名は「不語堂」です。

入力：hongming

校正：noriko saito

2004年7月15日作成

2013年8月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

池袋の怪

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>